26-R2

外国人留学生選抜（第２期）

小　論　文

1．指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙の所定欄に受験番号・氏名・フリガナを記入しなさい。

3．この問題冊子の不ぞろい等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に申し出なさい。

4．解答時間は60分です。

5．試験終了まで、受験者の退出は認めません。

試 験 問 題

問題 次の文章を読み、後の各問に答えなさい。

15年ほど前のある日の晩、私は大学院ゼミの飲み会に参加していた。結婚を機に大学院をやめることになった先輩の送迎会だった。「私、結婚したら毎日違う料理を作るんだ！」と彼女は嬉しそうに宣言した。好奇心旺盛で多趣味(ア)タケイな人であったから、おそらく先輩は実際に毎日違う料理を作ろうとしたのだろう。

先輩の宣言を私がいつまでも忘れられないのは、そこに「暮らしは自由にデザインできる」という新しい発想の輝かしさと苦しさを嗅ぎつけたからだと思う。私自身もまた、学問に携わってきたこの十数年のあいだ、週の半分以上はスーパーに通って夕食を作り、献立に悩んだり、弁当のおかずに苦慮してきた。料理研究家の本やレシピ投稿サイトを調べて目先の変わった料理を作ることは楽しいし、「美味しい」と言われれば嬉しい。だが、毎日まったく違う料理を作ることはなかった。

「毎日違う料理を作るんだ！」という先輩の宣言から15年ほど経過した現在、「暮らしは自由にデザインできる」という発想はより一般的になったように思われる。「自己分析」や「拡張現実」や「ライフハック」といった言葉の広まりは、「自己」や「現実」や「生活」が所与の条件（出身地や階級や社会構造など）によって規定されるものとはみなされなくなってきたことを示している。もちろん、そうした条件がまったく影響力を失ったわけではないが、それらを対象化して分析し拡張し改変することによって、私たちはより自由に自分らしく生きていくことができる。こうした発想が普及し称揚され規範化されるにつれて、「生活」は逃れえない必要性の源泉ではなく、自由なデザインの対象として把握されるようになる。

(1)その結果、生活は学問的分析へと接近する。近年ではインターネットやスマートフォンを通じて専門的知識へのアクセスがより簡易化され、客観的な事実だけでなく学問的な視角全体を生活に導入することが容易になってきた。家事の「見える化」、鍵付きアカウントによる「同調圧力」への抵抗、「消費社会」批判としてのミニマリスト的消費。暮らしを対象化しデザインしていく実践において、生活を分析する学問的視角全体が生活の一部に組み込まれる。

日々、私たちは分析している。学問的営為に関わっているわけではなくても、自らの能力や心理状態や仕事の進捗や周囲との関係を認識し、考察し、整理した上で次の行動を模索している。世界は私の外部にあり、私の認識の対象であり、考察を通じて介入する客体とされる。もちろん、私たちは常に能動的なわけではない。精神的に、身体的に、能力的に、時間的に圧迫され、様々な思惑と規範と関係性のなかを振りまわされている。 [A] 、それは客体としての私にすぎない。どれほど受動的であるにせよ、それを対象化し分析し介入することはできる。少なくともそう考えて、そうふるまっている人間が少なくないことは、例えば「フェイスブック」の個人ページをざっとスクロールすれば明らかだろう。

【A】 学問的な知は、そうした「分析する私」のプロフェッショナルによって産出され、そのアマチュアによって受容される。経済学にせよ、心理学にせよ、社会学にせよ、学問的な知識の作り手と受け手はともに能動的だ。経済的活動や心理的動態や社会的関係は、私の外にあり、認識し分析し——決して容易ではないにせよ——操作する対象とされる。

【B】 では、それを可能にしているものは何だろうか。乱暴に言えばそれが「暮らし」である。

【C】 学問的分析が図（figure）であるならば、暮らしは「地」(ground) だ。絵画という表現（図）が、額縁という背景（地）を必要とするように、「分析する私」はその背景としての「暮らす私」に依存する。だから、「暮らし」を「分析」することは極めて難しい。特定の暮らしを前提として展開される知は、その前提自体に矛先を向けると意外な弱さを露呈する。それが依存する特定の暮らし方を相対化できず、ただ倫理的に肯定するに留まるか、あるいは、基底に関わらない枝葉末節を(2)衒学的に言祝ぐだけに終始しかねない。分析対象を「図」として学問的知識を「地」

として位置づける通常の分析のあり方が、それが反転しやすい「暮らし」という対象において、しばしば失効してしまうからである。

【D】 暮らしは学問的分析の「境界条件」(対象に対する有意な分析がなされうる範囲とそれ以外を分けるために設定される条件）を構成するとも言えるだろう。「分析する私」の視界において何が有効で有意味で有意義か、それは「暮らし」という見えない足下においてやんわりと規定されている。例えば、夢を見たらその解釈のもと直ちに狩りに行くパプアニューギニア・ダリビの暮らしにおいて、夢を無意識の抑圧と結びつけるフロイト流の精神分析は有意性を持たない。あらゆる事象の源泉を個人の内面に求めていく、そういった暮らしを私たちがしている限りにおいて、精神分析は学問的な知となりえた。学問的分析は、境界条件としての暮らしの可変性を捨象し固定化することで一定の客観性を伴った外部観測（外側からの観察と分析）の体裁を整える。近年、精神分析や無意識という概念への学問的参照が減少してきたことは、それが元から学問的妥当性を欠いていたことではなく、私たちの暮らしが個人の内面の探究を中軸に据えるものではなくなってきたことの帰結である。

【E】 ジェンダーや家族を対象とする学問的分析が、その言葉遣いや概念使用の終わりなき再帰的考察に嵌(は)まりやすいのも、しばしば学問ではなくイデオロギーの発露だと揶揄(やゆ)されるのも、しかしながら学問上の変革の契機となってきたことにも確かな理由がある。それらは知を規定する前提を――それに規定されながらも――掘りかえす試みだからだ。暮らしという境界条件の（異郷において調査対象者と共に生活することによる）変動に依拠して学問的分析の前提を掘りかえし拡張する営為として人類学的なフィールドワークを捉えれば、それは異国での長期調査を必須とするものではなくなる。日々様々な年代の家庭料理を作るという筆者の実践に基づく記述もまた――変動の規模こそ小さいものの――そのような意味での人類学的フィールドワークの産物である。ただし、それは、社会科学的分析が成立する範囲を(イ)若干逸脱した場所で展開されることになる。学問の暗黙の前提としての「暮らし」において家庭料理が重要な位置を占めており、だからこそ学問的対象としては一見して重要とは思えないものとなっているからだ。

【F】 もちろん、ここで扱うのは境界条件としての暮らしそれ自体ではない。私たちの生活を構成する要素のなかでも、料理はとりわけ様々な評価や批判や提言が集中するものとなっており、しばしば「分析する私」の視界に入り込んでくる。だが同時に、家庭料理を分析的に語る様々な言葉は、それらの齟齬(そご)や矛盾や変容を通じて境界条件としての暮らしを照らしだすものともなっている。

暮らしは常に変わり続ける。「家庭料理」という言葉からイメージされるものも、激しい変化のなかでつかのま安定した像を結んでいるだけのものにすぎない。にもかかわらず、私たちはそれを脈々と継承された不動のものであるかのようにイメージする。社会構築主義的に言えば家庭料理もまた社会的に構築されるものであり、同時に、社会的構築の基盤をなす暮らしを構築する契機である限りにおいて社会構築主義では捉えられない構築物である。

（出典：久保明教『「家庭料理」という戦場――暮らしはデザインできるか？』コトニ社、2020年）

※出題にあたり、原文を一部改変した。

問１　下線部(ア)の片仮名を漢字に改め、下線部(イ)の漢字の読みを平仮名で記しなさい。（楷書で丁寧に書くこと）

問２　空欄部 [A] に入る接続詞として正しいものはどれか。次の選択肢の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

① そして　② また　③ だから　④ でも

問３　下線部(1)「その結果、生活は学問的分析へと接近する」とあるが、筆者の考える「その結果」を説明した次の文の空欄 [X] と空欄 [Y] に入る、最も適当な言葉を本文中よりそれぞれ２字で抜き出して記しなさい。

「自己」や「現実」や「生活」に対する所与の条件を [X] 化する発想が [Y] 化される結果。

問４　下線部(2)「衒学的に言祝ぐ」という表現を、他の表現で言いかえる場合、最も近い意味を持つものはどれか。前後の文脈を参考にしながら、次の選択肢の中から一つ選び、記号で答えなさい。

① 問題点を挙げながら、学問的に否定する
② わかりやすい言葉で、心を込めながら説明する
③ 知識をひけらかしながら、ほめたたえる
④ 短く簡潔に、形式的な表現で伝える
⑤ 道徳的な欠陥を指摘しながら、非難する

問５　本文からは次の段落が抜け落ちている。これを補う場合、本文中の【A】～【F】のどの段落の後に挿入するのが最も適当か。そのアルファベットを一つ選び答えなさい。

> 睡眠をとり、食事をして、体を休める。起きていれば眠くなり、時間が経てば腹が減り、毎日何度かはトイレにいき、他人が煩わしくなれば自分のスペースにひきこもる。全て受動的だ。避けがたい必要性を充足することができてはじめて私たちは受動性を退け、「分析する私」となる。難民になっても学問は続けられると断言する学者を、私は容易に信用しない。学問は主に暮らしへの埋没を回避できる人々によって営まれてきたし、そうであるからこそ、学問的な知は暮らしを言語化するのに向いていない。

問６　波線部「『暮らしは自由にデザインできる』という発想はより一般的になったように思われる」といった筆者による現状分析があるが、「暮らしを自由にデザインできるかどうか」に対するあなたの考えを、自身の経験や身の回りの事例を用いながら600字以内で述べなさい。

問題はここまでです